また、明るく元気で友達とも仲が良かったので、みんなに好かれました。

春になってさくらのつぼみがふくらむと、村の人々は、田畑に出て苗代をつくったり、種をまいたりします。

さくらの花がさくころ、うずみね神社のお祭りになり、山に登れるようになります。この日は、近くの人々がたくさん山に登って一日中にぎやかになります。

頂上に立って四方を見わたすと誠に雄大な景色なので、人々の気持ちも大きくなり、胸いっぱい希望がふくらんできます。

民吉郎もまた、遠くの空をながめながら大きな夢をもつようになりました。

二宮金次郎や偉人のものがたりを読むにつれ、江戸にいってもっともっと勉強したいと思うようになり、両親にお願いしました。

両親は、民吉郎があんまり熱心なので、のぞみをかなえてやることにしました。

民吉郎は、米を背負い二百四十キロメートルもある遠い道を歩いて、江戸に行き有名な坂本玄斎先生のじゅくに入りました。